

令和元年6月27日現在

機関番号：74306

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16948

研究課題名(和文)近世上方の屋瓦に関する基礎的研究

研究課題名(英文)Basical reserch about the roof tiles

研究代表者

市川 創 (Ichikawa, Tsukuru)

公益財団法人古代学協会・その他部局等・客員研究員

研究者番号：80372134

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、江戸時代の大坂で生産された瓦を主な研究対象として、その生産と流通の実態の把握に努めた。その結果、瓦がどのように変遷するかという基礎的な知見を得ることができたほか、時期によって流通範囲に変化があることを把握することができた。こうした流通範囲の変化は、17世紀における航路開発や江戸幕府の産業政策と関わっている可能性が高く、今後、他分野との連携によって、より知見を深められる可能性がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

江戸時代に生産された瓦については、その膨大な出土量が災いして、これまで考古資料として十分に評価されてこなかった。本研究のもっとも大きな意義は、こうした江戸時代の瓦を歴史復元のための資料として位置付けた点にある。また大坂における瓦の生産拠点であった南瓦屋町の水帳(住人台帳)の翻刻や、航路開発や幕府の産業政策との関連性を指摘したことで、今後、近隣分野との連携により、さらに知見が深められる可能性を指摘したことも、本研究の成果として挙げられる。

研究成果の概要(英文)：In this study, I studied about the roof tiles produced in Osaka in the Edo era to grasp its production and distribution.

As a result, I was able to get basic knowledge how the roof tiles changed. In addition, I was able to grasp that the distribution range was changed by time. The change of the distribution range is more likely to associate with the development of transportation by water in the 17th century and the industrial policy of the Edo Shogunate. I think that knowledge may be deepened more in future by cooperating with other fields.

研究分野：考古学

キーワード：上方瓦 近世 大坂

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近世における上方の手工業については、モノを生み出す産業でありながら、その歴史的評価に関わる研究は文献史料を中心とし、物質的・考古学的実証に乏しい。いっぽうで、近年は江戸時代も考古学的な発掘調査対象であるとの認識が高まっており、江戸(東京)とならび、上方(近畿地域)では手工業に関するものを含め、近世に関する考古学な情報が蓄積されている。

しかし、本研究が対象とする瓦については、多量の出土資料が蓄積されている反面、必ずしも十分に研究が進展していない。発掘調査資料を対象とした分析としては、瓦屋町遺跡における評価などがあり、また、全国的な動向を俯瞰するなかで大坂をはじめとする上方についても言及されているが、いまだ素描の域を出ておらず、経時的な変遷案も確実に把握できていなかった。

2. 研究の目的

上記の研究状況のいっぽうで、江戸時代前半期の上方における瓦生産で圧倒的なシェアを誇ったとされる特権町人=寺島家は、大坂では「三町人」に数えられるほど隆盛することや、しかし18世紀以降は、他産瓦のシェア拡大や、幕府による保護政策の転換により、寺島家およびその瓦は没落の一途をたどることが把握されていた。こうした近世の産業構造にも関わるドラスティックな動きは、文献史料から描かれているのみで、考古学的実証を欠く。

そこで本研究では、上方における瓦の様相を把握したうえで各地への流通状況を分析することで、当該期における流通経済のあり方についても、知見を得ることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、近世の上方で製作された瓦の生産と流通の実態を明らかにするため、御用商人寺島家の本拠地である大坂の資料を中心として、編年や分布の把握といったオーソドックスな考古学的手法で分析した。

具体的には、まず、大坂で出土している資料から廃棄年代が特定できるものを抽出し、大坂産瓦の特徴を把握するとともに、編年案を作成した。その後、全国の発掘調査成果を参照して大坂産瓦と類似した特徴を有するものを抽出し、これらの資料を各地に出向いて実見した。この作業により、実際に大坂で生産されたものか、あるいは各地で模倣して製作されたものかを特定し、大坂産瓦の分布状況を時期別に把握した。

加えて、比較的豊富に残されているが、いまだすべてが翻刻されていない文献史料、とりわけ寺島家が本拠を置き瓦工人が集住した南瓦屋町の水帳について、文献史を専門とする研究協力者と協働して翻刻し、分析を加えた。

最後に、上記の方法による知見を総合し、近世の上方に関して歴史資料としての知見が深まるよう、考察を加えた。

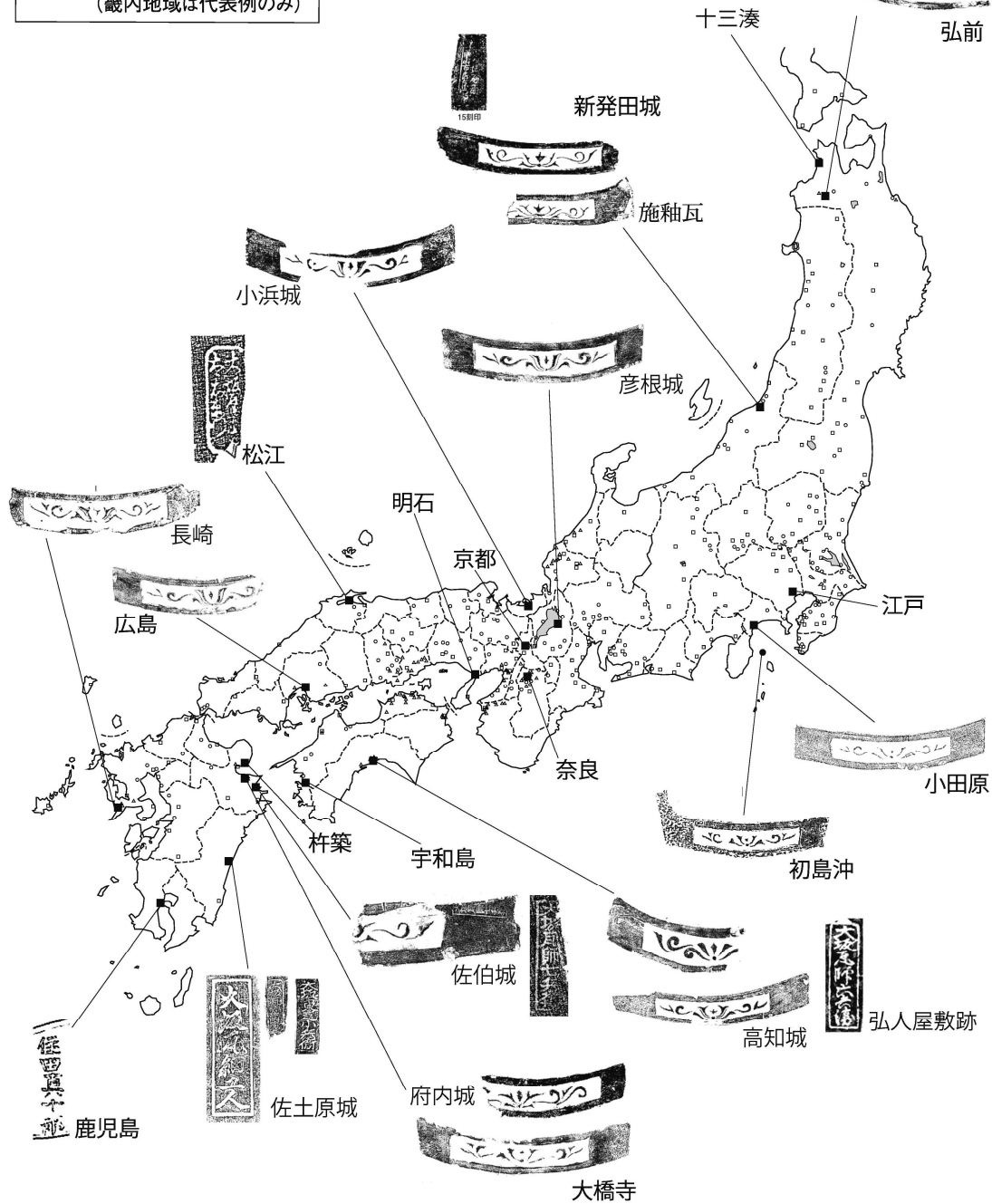
4. 研究成果

本研究では、近世の上方、とりわけ大坂で生産された瓦について、その生産の流通を把握することを目指した。そのためにまず、時期区分を設定し、豊臣期と徳川期の様相の把握に努めた。また徳川期については、大阪市内から出土している刻印を集成し、また他国から搬入されたとみられる瓦についても言及した。これにより、軒平瓦の変遷を明らかにするとともに、豊臣期と徳川期の違いを明らかにできた。具体的には、豊臣期では武家屋敷による様相の違いは認められないのに対し、徳川期では国元から搬入される瓦などにより、とくに蔵屋敷において、藩ごとに異なる様相を示す。これは中央集権化を目指した豊臣政権と、封建制に属する幕藩体制の違いを端的に表す事象であると考えている。徳川期における瓦の変遷については、特別史跡大坂城跡の資料を基準資料として示すことで、従来の編年に比べ、より変遷が把握しやすくなったものとする。とりわけ、徳川期の「祖型橘唐草文」の認識は、大坂産瓦の流通を考えるうえで重要な知見である。

続いて、大坂「産」の認定基準を示したうえで、その全国的な分布状況の把握に努めた。現状で出土資料や銘文から大坂産瓦の分布を確認できている城郭および城下町としては、江戸のほか、北から弘前・十三湊、新発田、小田原、彦根、小浜、京都、奈良、明石、松江、広島、高知、宇和島、長崎、大分、佐土原、鹿児島などがある(下図)。このうち、徳川期の大坂産瓦が出土するのは高知などごくわずかであり、その他の地域では、先にみた祖型橘唐草文の時期、すなわち17世紀後半~18世紀初頭の徳川期に、急速に分布範囲が拡大することがわかる。その分布が日本海側では北は弘前まで及ぶこと、太平洋側では江戸以北で出土していないことを考えれば、当該期における海運の発達、とりわけ西廻り航路の整備と大坂産瓦の分布圏が相関することが推察される。

また文献史料に関しては、元禄、享保、文政の3時期の水帳の翻刻をもとに、文献史料から瓦工人の足跡を把握しようとした。この作業により、これまで翻刻された『寺島家文書』に依存しすぎるくらいがあったように思う史料検討に対し、より実態に近い形で瓦工人を把握することができるようになった。今回は元禄、享保、文政の3時期の水帳しか翻刻することができなかったが、他の時期の水帳、また水帳に付随する水帳絵図などの史料群についても翻刻、検討を行うことで、より豊かな知見が得られるものとする。

- 旧国境
- : 城郭・城下町
- : 陣屋
- △ : 寺院など
- : 大坂式軒平瓦が出土している城郭など (畿内地域は代表例のみ)



大坂産瓦の分布 (軒平瓦の縮尺は1:8、刻印の縮尺は1:2)

今後の研究の展望を述べておきたい。慶長20(1615)年のいわゆる一國一城令により、織豊期における築城ラッシュは終わりを迎えた。瓦の主要な供給先の1つであった城郭での需要が激減し、かついまだ一般の町屋には瓦が普及していなかった17世紀代には、各藩が独自に瓦の生産体制を維持することは容易ではなかったと推測される。そうしたなか、幕府の保護を受けて公儀御用を担った寺島家の生産規模は、全国的にみても卓越したものであったろう。こうした大規模な製品の受注は、西廻り・東廻り航路の開発をはじめとする海運の発達によって支えられていた。考古資料としては、17世紀後葉~18世紀初頭における祖型橘唐草文軒平瓦の全国的な分布が、当時の大坂産瓦(大坂寺島家)の隆盛を示している。大坂産瓦のピークはおそらく、江戸向けの大量の御用を担った宝暦年間であったろう。その後、享保5(1720)年の瓦葺き奨励、また大坂では妙知焼(1724年)による広範囲の罹災などを契機として、18世紀前半のなかで一般の町屋にも瓦葺きが浸透していくようである。しかしながら、こうした民需の増加

は、御用商人たる寺島家にとっては必ずしも良い方向には向かわなかったようである。『寺島家文書』にみえるたび重なる触書、および考古資料にみえる「堺」銘刻印瓦の全国的な出土が、大坂産瓦が衰退する兆候を示している。おりしもこの頃、享保期（1716～1736年）を境にして公用輸送機構が動揺し、幕藩体制の運輸体制の破綻の兆候が現われはじめる。同時に経済の大坂への一極集中は揺らぎ、近世後期的な地方市場間の取引の活発化は、中央市場としての大坂の相対的な地位低下をもたらしている。瓦についても、こうした全国的な経済構造遷移の一部として捉える必要があるだろう。その結果として、18世紀後半以降には大坂市中でも「堺」銘刻印瓦が出土し、19世紀には大坂城でさえ堺産の瓦が多数を占めるようになるのである。

またこうした大坂産瓦のシェア低下のいっぽうでは、豊後の大橋寺・西法寺について大坂式の瓦が模倣されたという指摘があるほか（山崎 2018）、弘前、新発田、鹿児島で生産された瓦について、大坂産の瓦が模倣された可能性がある。これらの模倣は18世紀以降に行われたとみられ、大坂式瓦のブランドイメージが低下するなかでこうした行為が行われることについて、今後、評価が必要だろう。

上記のような大坂産瓦に関する知見に加え、京都、奈良、堺をはじめとする他の上方瓦に関する理解を深めることで、瓦を通じて幕藩体制の一端が明らかにできるものと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

- 1) 市川 創、2019年「幕藩体制下の瓦と社会」『考古学ジャーナル』No.726、査読なし、15 - 18 頁
- 2) 市川 創、2017年「大坂における近世瓦の生産と流通」『第66回 埋蔵文化財研究集会 資料集』、査読なし、51 - 60 頁

〔学会発表〕(計 1 件)

- 1) 市川 創「近世大坂における瓦の生産と流通」(大阪歴史学会考古部会例会)、2019年

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
開設していません。

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名： 佐藤 寛子、島崎 未央、山下 大輝

ローマ字氏名： SATO Hiroko, SHIMAZAKI Mio, YAMASHITA Daiki

科学研究費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、募集要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。